

温かい町

この町に越してきて、ちょうど一年になる。越してきたばかりは新築の家の匂いがかよそよそしく感じられて、自分の家にも新しい町にもなかなか馴染めなかった。

それまで住んでいた町は、おしゃれな感じがする新興住宅街で、広い道路を緑のアーチのようにおおう美しい街路樹が大好きだった。そんな生活から、いわゆる下町へやってきたものだから、わたしの、いや、わたしたち家族の生活は百八十度変わった。

越してきて一番最初に驚いた事は、学校から帰ってくる途中で、ご近所のまだろくに顔も知らないようなおじさんやおばさんから「お帰り！」と声をかけられたことだ。道ですれ違う人が「お帰り！」、角の八百屋のおばさんが「お帰り！」、向かいの家のおじさんが「お帰り！」。わたしはなんて返事したら良いのか戸惑い、「こんばんは」はおかしいから、とりあえず

静岡県立浜松西高等学校中等部二年

はまつにしこうとうがっこうちゅうぶ

山下

やました

綾

あや

「ただいま」と小さな声で言った。こんな事は、それまでの生活ではありえなかった。ご近所の人に会えばもちろんあいさつはしたが、それは「こんにちは」「こんばんは」であって、「お帰り」ではなかった。だから「お帰り！」なんて、まだよく知らない人から言われた時には、かなり照れくさかったが、なんだか心がほんわかと温かくなった。夕闇の中、ご近所の家々の灯りが急に優しく柔らかく見えてきて、この町が少し好きになった。

朝になると、二軒向こうのおばさんが、庭で取れたトマトやきゅうりを持ってきてくれる。留守中に夕立ちがあった時には、隣の家のおばさんが、うちの洗濯物を取り込んでおいてくれる。向かいの家のおばさんは、晩のおかずを余分に作ったからと言って、よく持ってきてくれる。母が風邪で寝込んだ時には、裏のおじさんがお刺身を買ってきてくれた。

この町に来て、父も母もすっかり変わった。町内会の組長になった父は、町内の寄り合いに出たり、夏祭りにはやぐらを組んだりトウモロコシを焼いたり、とにかく夕方になると近所のおじさんたちとよく出かけるようになった。

母は、スーパーマーケットに行かなくなった。毎日、角の八百屋さんへ行行って買い物をしながら世間話をし、ては帰ってくる。洗濯物を干しながら、隣の家のおばさんといつまでも立ち話をしている。そんな父と母を見ていて、最初は少し驚いたが、何だか嬉しかった。でも、一番変わったのはわたしかもしれない。ご近所の人に「お帰り！」と言われると「ただいま！」と元氣よく答えるようになった。作り笑顔ができないわたしは、「愛想のない子」とよく言われるが、ご近所の人に会うといつの間にか笑顔になっていて、自分でも意外だった。わたしは、いつの間にかこの町が大好きになっていった。知らないうちに、わたしたち家族はすっかりこの町に溶け込んでいたのだった。

わたしたち中高校生は、精神的に不安定な時期にいると言われている。わたし自身、そう感じる時もある。にはある。そんなわたしたちが今、一番必要としているものは何だろうか？友情、楽しい学校生活、部活動など、人によってさまざまだと思うが、でもその根底にはやはり、家族とのホッとできる生活がなくてはならないと思う。いつも自分を温かく包み込んでくれる家族がいるという安心感があって初めて、わたしたちは

自分がやりたい事に思い切り打ち込むことができるのだから。

そして、そうやってわたしたちを見守ってくれるのが家族だけでなく、町もだとしたら、なんて素敵だろう。町がひとつの大きな家族のようになってお互いを思いやりながら仲良く楽しく暮らしていければ、そういう温かい雰囲気の中でこのびと育てられるわたしたちは、人を悲しませたり傷つけたりするなんて気持ちには絶対なれないはずだ。

非行や犯罪を防ぐのは、最新式の携帯電話でもなければインターネットでもない。人と人との心の触れ合い、心の温かさだと思う。この町で暮らし始めて、わたしはそれを知った。